九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

イスタフリー著アラビア語地理書『諸道と諸国の書』とそのペルシア語訳の比較研究

西村, 淳一
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 助手 : 東洋史

https://doi.org/10.15017/7973

出版情報：史淵. 143, pp.15-41, 2006-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

イスタフリー著アラビア語地理書『諸道と諸国の書』とそのペルシア語訳の比較研究

西村淳一

はじめに

モンゴル侵入以前のイスラーム世界で多くの地理書[1]が著されたことは周知の事実である。その大部分はアラビア語で記されたが、一部はペルシア語――アラビア文字でつづられた近世ペルシア語――で記された。この時代の主要なペルシア語地理書は以下の3種類である。

著者不明『世界諸境域誌』(10世紀後半)

イスタフリー著(訳者不明)『諸道と諸国の書』(12世紀ごろ)

ムハンマド・ブン・ナジーブ・バクラーン著『世界の書』(13世紀初頭)[2]

これらペルシア語地理書は、従来の地理学史研究において、「ムスリムの地理書/地理学」[3]という包括的枠組みの中、アラビア語地理書と一纏めにして扱われた。例えば『イスラーム百科事典』中の「ジュグラーフィヤー(地理学)」の項や、クラチコフスキー(Крачковский, И. Ю.)著『アラブ地理学文献』、ミケル(Miquel, S.)著『11世紀中葉までのムスリム世界の人文地理学』などにおけるペルシア語地理書の扱いがその状況を端的に示している[4]。これら地理学史研究においては、アラビア語地理書とペルシア語地理書の差は、書かれた言語がアラビア語かペルシア語かという表面的特徴を除いて、ほとんど問題にされていない。

このような状況の背景には、現存するペルシア語地理書の数が少ない上に、その記述スタイルや内容にアラビア語地理書の影響がはっきりと見てとれるという事情がある。しかし、アラビア語地理書とペルシア語地理書の間の共通性、

あるいは「ムスリムの地理書」として一纏めに扱う根拠については、この時代のイスラーム世界で執筆されたという書誌面の共通性を除いて、まだ十分に分析・検討されていない。

一方、個々の地理書研究の立場からみると、各々のペルシア語地理書に関しては記述内容に見られる特殊性が先行研究において指摘されている。例えば最も古いペルシア語地理書である『世界諸境域誌』については、イラン[5]東部や中央アジアに関する記述の中に他の地理書で見られない内容を多く含んでいることが顕著な特徴として知られている[6]。しかし、先行研究の指摘するこのような内容面の特徴は、あくまで『世界諸境域誌』という一地理書の特徴であって、決してペルシア語地理書全般の特徴ではない。だとすれば、ペルシア語地理書の、ペルシア語地理書であるがゆえの独自性は果たしてどこに見出されるのだろうか。この根本的な問いは先行研究において見落とされている。

そこで筆者は、上に述べた2つの問題点、すなわち①「「ムスリムの地理書」としてのアラビア語-ペルシア語地理書間の共通性」と②「ペルシア語地理書の、ペルシア語地理書であるがゆえの独自性」の解明を最終的な研究目標に定め、まずはその出発点として、イスタフリー著のアラビア語地理書『諸道と諸国の書』(10世紀中葉の書)とそのペルシア語訳本(12世紀ごろの書)を比較検討することにした。この地理書を研究対象に選んだ理由は、記述内容の違いに囚われることなく、アラビア語による地理叙述とペルシア語による地理叙述をダイレクトに比較できるからである[7]。結果として言語面にこだわった分析を行うことになるが、この種の比較を徹底的に行った先行研究は存在しない。本稿では、上記地理書のアラビア語原本中の記述がペルシア語訳本中でどのように訳されているか、特に単語(名詞)レヴェルでどのようなペルシア語訳の特徴が見られるのかという点に焦点を絞り、アラビア語地理書とペルシア語地理書の比較研究を試みることにする。

第Ⅰ章 『諸道と諸国の書』の書誌情報

まずは『諸道と諸国の書』の書誌情報について、先行研究を利用して簡単に

述べておこう[8]。

著者イスタフリー（al-Iṣṭakhrī＜Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārisī）は、西暦10世紀初葉から中葉にかけて生きた謎多き人物である。生年没年ともに未詳。彼の名前中の地名ニスバから、イラン南部に位置するファールス地方の一都市イスタフルの出身であったと考えられる。おそらくバグダードで諸学を学び、イスラーム世界各地――少なくともアラビア半島からトランスオクシアナまで――を遍歴した。340/951年ごろに、旅の中で得た情報を生かして地理書『諸道と諸国の書』を執筆したと推測されている。

『諸道と諸国の書』は、イスラーム世界（Bilād al-Islām）を20の地域（iqlīm）に区分して、その地域ごとに地図と解説を付した体系的地理書である[9]。その内容は、土地の形状などの自然地理情報を含む一方で、その時代の諸都市の状況や人びとの習俗・文化を記録した地誌的側面を持ち合わせている。後代の地理学者イブン・ハウカル（Ibn Ḥawqal＜Abū al-Qāsim b. ‘Alī al-Naṣībī　没年未詳（10世紀後半））やムカッダスィー（al-Muqaddasī＜Abū ‘Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad b. Abī Bakr al-Bannā’ al-Shāmī　没年未詳（10世紀後半））は基本的にこの記述スタイルを継承した。また、後世の地理書において本書からの引用が多く見られることや、本書自体が12世紀頃ペルシア語に訳されて広く普及したことから、本書がイスラーム世界の地理学に大きな影響を及ぼしたことは明らかである。

『諸道と諸国の書』アラビア語原本の写本は、現在のところ世界各地の図書館に15点現存しており、これらの写本から下記2種類の校訂本が出版されている[10]。

① al-Iṣṭakhrī, *Masālik al-Mamālik*, (ed.) M.J. de Goeje, Leiden, 1927.
（以下、この校訂本を *Masālik A* と略記する）

② al-Iṣṭakhrī, *al-Masālik wa al-Mamālik*, (ed.) Muḥammad Jābir ‘Abd al-‘Āl al-Ḥīnī, al-Qāhira, 1961.

本稿ではこのうち①を利用する[11]。

一方、ペルシア語訳本の写本は、主にイランの図書館を中心に19点現存して

おり、校訂本は下記2種類が出版されている(12)。

③ Iṣṭakhrī, *Masālik va Mamālik tarjome-ye Fārsī qarn-e panjom/sheshom hejrī* (英題：*Masālik wa Mamālik Anonymous Persian Translation From V/VI Century A.H.*), (ed.) Īraj Afshār, Tehrān, 1340 (3rd ed. 1368).

(以下、この校訂本を *Masālik P* と略記する)

④ Iṣṭakhrī, (tr.) Muḥammad b. As'ad b. 'Abd Allāh Tustarī, *Mamālik va Masālik*, (ed.) Īraj Afshār, Tehrān, 1373.

このうち④は③の底本と別系統の写本(ボドリー図書館蔵 Ouseley 373)を底本としている。本稿では、論点の複雑化・煩雑化を避けるべく、③のみを利用する。④の検討は今後の課題としたい。

それでは、本論に移ろう。

第II章　地理関連の単語(名詞)の比較

翻訳とは「ある言語表現を体系の異なる別な言語で言い換えること」であり、翻訳者は通常、統語上はもとより個々の単語レヴェルにおいても、ある言語から別な言語へと言い換えるよう努めるものである。この前提は当然、アラビア語からペルシア語への翻訳の場合でもあてはまる。では『諸道と諸国の書』の場合、あるアラビア語単語がペルシア語単語へ訳される際、具体的にどのような対訳がなされているのだろうか。そして、同書が地理書であることを念頭に置いたとき、その対訳の仕方にはどのような特徴が見出せるだろうか。以下では特に、地理書の基礎語彙である地理関連の単語に注目して、*Masālik A* と *Masālik P* を比較してみたい。

1) 地形・人文現象・物質・動植物・その他

例えば山、川、海などといった地形に関する単語は、以下のように訳される。

	Masālik A		*Masālik P*
• 山 ：	جبل (jabal)	→	کوه (kūh)
• 川 ：	وادی (wādī) نهر (nahr)	→	وادی (vādī) رود (rūd)
• 海 ：	بحر (baḥr)	→	دریا (daryā)
• 湾 ：	خلیج (khalīj)	→	خلیج (khalīj)
• 海岸 ：	ساحل (sāḥil)	→	ساحل (sāḥil)
• 岸 ：	شط (shaṭṭ)	→	کناره (kanāra) کرانه (karāna)
• 湖 ：	بحیرة (buḥayra)	→	دریاچه (daryācha)
• 泉 ：	عین (‘ain)	→	چشمه (chashma)
• 平地 ：	سهل (sahr)	→	هامون (hāmūn)
• 荒無地 ：	مفازة (mafāza) برية (barrīya)	→	بیابان (biyābān)
• 沙漠 ：	بادية (bādiya)	→	بادیه (bādiya)
• 砂（地）：	رمال (rimāl)(pl.)	→	ریگ (rīg)
• 丘：	تل (tall)	→	تل (tall)
• 茂み ：	غياض (ghiyāḍ)(pl.)	→	بیشه (bīsha)
• 島（半島）：	جزيرة (jazīra)	→	جزیره (jazīra)
• 峡谷（隘路）：	شعب (shi‘b)	→	شکاف (shikāf)
• 土地（地面）：	ارض (arḍ)	→	زمین (zamīn)

都市や街道などの人文現象に関する単語は、以下のような具合である。

• （地方の） 中心都市 ：	قصبة (qaṣaba)	→	قصبه (qaṣaba)
• 港町 ：	فرضة (furḍa)	→	فرضه (furẓa)
• 都市 ：	مدينة (madīna) بلد (balad)	→	شهر (shahr)
• 宿駅：	رباط (ribāṭ)	→	رباط (ribāṭ)
• 村 ：	قرية (qarya)	→	دیه (dīh)
• 城 ：	حصن (ḥiṣn)	→	حصن (ḥiṣn) حصار (ḥiṣār)
• 宮殿 ：	قصر (qaṣr)	→	کوشک (kūshk)
• 内城 ：	قلعة (qal‘a)	→	قهندز (quhunduz)
• 市街地 ：	مدينة (madīna)	→	شارستان (shāristān)

・都市の郊外地区：	ربض (rabaḍ)	→	ربض (rabaẓ)
・市場　：	سوق (sūq)	→	بازار (bāzār)
・路地（街区）：	سكة (sikka)	→	محله (maḥalla)
・邸宅：	دار (dār)	→	سرا (sarā)
・門　：	باب (bāb)	→	در (dar) دروازه (darvāza)
・井戸　：	بئر (bi'r)	→	چاه (chāh)
・池：	حوض (ḥawḍ)	→	حوض (ḥawẓ)
・カナート：	قنى (qanan)(pl.)	→	كاريز (kārīz) كهريز (kahrīz)
・道（街道）：	طريق (ṭarīq) جادة (jādda)	→	راه (rāh) جاده (jāda)
・橋　：	قنطرة (qanṭara)	→	پول (pūl)
・壁　：	جدار (jidār) سور (sūr)	→	ديوار (dīvār) باره (bāra)
・耕作（地）：	مزارع (mazāri') زرع (zar') زروع (zurū')	→	مزارع (mazāri') كشتزار (kishtzār) كشاورزى (kishāvarzī)
・果樹園：	كروم (kurūm)(pl.) بستان (bustān)	→	بستان (bustān) باغ (bāgh)
・牧草地：	مرعى (mar'an)	→	چراگاه (charāgāh)
・私有地　：	ضياع (ḍiyā')(pl.)	→	ضياع (ẓiyā')
・モスク　：	مسجد (masjid)	→	مسجد (masjid)
・(一時的)礼拝場所　：	مصلا (muṣallā)	→	عبادتگاه ('ibādatgāh)
・ミフラーブ：	محراب (miḥrāb)	→	محراب (miḥrāb)
・ミンバル：	منبر (minbar)	→	منبر (minbar)
・ドーム：	قبة (qubba)	→	گنبد (gunbad)
・墓場　：	قبور (qubūr)	→	گورستان (gūristān)
・鉱山（産地）：	معدن (ma'dan)	→	معدن (ma'dan)

物質に関しては、水などの単純なものから鉱石類などの専門的なものに至るまで多くの単語が記されている。いくつかの例を示してみよう。

・水　：	ماء (mā')	→	آب (āb)
・空気（気候）：	هواء (hawā')	→	هوا (havā)

• 木材 ：	خشب (khashab)	→	چوب (chūb)
• 石（岩）：	حجر (ḥajar) صخر (ṣakhr)	→	سنگ (sang)
• 土：	طين (ṭīn) تراب (turāb)	→	گل (gil) → خاک (khāk)
• 焼煉瓦：	آجر (ājurr)	→	خشت پخته (khisht-i pukhta)
• 宝石 ：	جوهر (jawhar)	→	جوهر (jawhar)
• 真珠 ：	لولؤ (lu'lu')	→	مروارید (marvārīd)
• 金 ：	ذهب (dhahab)	→	زر (zar)
• 銀 ：	فضة (fiḍḍa)	→	سیم (sīm) نقره (nuqra)
• 鉄 ：	حديد (ḥadīd)	→	آهن (āhan)
• 鉛 ：	رصاص (raṣāṣ)	→	ارزیز (arzīz)
• 石油：	نفط (naft)	→	نفت (naft)
• 磠砂：	نوشادر (nūshādhir)	→	نوشادر (nawshādur)
• 竜涎香：	عنبر ('anbar)	→	عنبر ('anbar)
• 乳香：	لبان (lubān)	→	کندر (kundur)
• 絹：	حرير (ḥarīr) ابريسم (ibrīsam)	→	ابریشم (abrīsham)
• 綿織物：	ثياب قطن (thiyāb quṭn)	→	کرباس (karbās)

動植物に関する単語も比較的多く見受けられる。いくつか例を挙げると以下のような具合である。

• 木 ：	شجر (shajar)	→	درخت (dirakht)
• 果物 ：	ثمار (thimār)(pl.) فواكه (fawākih)(pl.)	→	میوه (mīva)
• ナツメヤシ：	نخيل (nakhīl)	→	خرما (khurmā)
• リンゴ：	تفاح (tuffāḥ)	→	سیب (sīb)
• バナナ：	موز (mawz)	→	موز (mawz)
• ブドウ	عنب ('inab)	→	انگور (angūr)
• イチジク：	تين (tīn)	→	انجیر (anjīr)
• シトロン：	اترج (utrujj)	→	ترنج (turunj)
• サフラン：	زعفران (za'farān)	→	زعفران (za'farān)
• サトウキビ：	قصب سكر (qaṣab sukkar)	→	نیشکر (nayshakar)
• クルミ：	جوز (jawz)	→	گوز (gawz)

・米：	ارز (aruzz)	→	برنج (birinj)
・家畜　：	سوائم (sawā'im)(pl.) مواش (mawāshin)(pl.)	→	ستور (sutūr)
・らくだ：	ابل (ibil)	→	اشتر (ushtur)
・羊：	شاة (shāt)	→	گوسفند (gūsfand)
・へび　：	حية (ḥayya)	→	مار (mār)
・さそり　：	عقرب (‘aqrab)	→	کژدم (kazhdum)
・魚　：	سمک (samak)	→	ماهی (māhī)

上記以外の単語で興味深いものとしては、以下のようなものがある。

・場所	مکان (makān) موضع (mawḍi‘)	→	جایگاه (jāygāh) جا (jā)
・辺境　：	ثغر (thaghr)	→	ثغر (ṣaghr)
・世界：	دنیا (dunyā)	→	جهان (jahān)
・寒冷地：	صرود (ṣurūd)	→	سردشیر (sardshīr)
・温暖地：	جروم (jurūm) حارة (ḥārra)	→	گرمشیر (garmshīr)
・距離：	مسافة (masāfa)	→	مسافت (masāfat)
・長さ：	طول (ṭūl)	→	درازا (darāzā)
・幅：	عرض (‘arḍ)	→	پهنا (pahnā)
・一日旅程：	مرحلة (marḥala)	→	مرحله (marḥala)
・ファルサフ （距離単位）：	فرسخ (farsakh)	→	فرسنگ (farsang)
・ミール （距離単位）：	میل (mīl)	→	میل (mīl)
・ジラーウ （長さ単位）：	ذراع (dhirā‘)	→	گز (gaz)
・バーウ （長さ単位）：	باع (bā‘)	→	بدست (bi-dast)
・東（の）：	شرقی (sharqī)	→	شرقی (sharqī)
・西（の）：	غربی (gharbī)	→	غربی (gharbī)
・南（の）：	جنوبی (janūbī)	→	جنوبی (janūbī)
・北（の）：	شمالی (shamālī)	→	شمالی (shamālī)

上に挙げた単語群は、本文中で使われる語彙の一部に過ぎないものの、地理の説明に欠かせない基本単語を中心としたサンプルである。これらを見ると、両

者で同一単語が使われている場合も少なくはないが、そのような場合は例えば「モスク」「ミンバル」「ミフラーブ」のような訳すことのできないイスラーム（宗教）関連用語であったり「礪砂」「絹」「ファルサフ」「ミール」のように語源がアラビア語ではない言語間共通語であったりし[13]、多くの単語は訳本中でペルシア語特有の単語へ言い換えられている（すなわち翻訳されている）と指摘できよう。これは一見当たり前のことのように思われるが、まさにこの点こそが訳本のペルシア語地理書としての存在意義を示している。

一方このような中で、ある一連のまとまった単語群は、一貫して訳本中でもアラビア語単語がそのまま使用されている。それが以下で見る「地域」を意味する単語群である。

2）地域

Masālik A 中の「地域」を意味する単語――以下ではこれを便宜的に「地域区分用語」と呼ぼう――には以下のようなものがある[14]。

• عمل (‘amal), pl. اعمال (a‘māl)	左記5単語は、都市や村を中心とする「地域」あるいは「地区」を示す[15]
• كورة (kūra), pl. كور (kuwar)	
• ناحية (nāḥiya), pl. نواح (nawāḥin)	
• رستاق (rustāq), pl. رساتيق (rasātīq)	
• طسوج (ṭassūj), pl. طساسيج (ṭasāsīj)	
• بلد (balad), pl. بلاد (bilād) بلدان (buldān)	左記2単語は、特に複数形で漠然とした土地の広がりを示す[16]
• دار (dār), pl. ديار (diyār)	
• حد (ḥadd), pl. حدود (ḥudūd)	地域間の境界域を示す[17]
• مملكة (mamlaka), pl. ممالک (mamālik)	「国」あるいは「圏」を示す[18]
• اقليم (iqlīm), pl. اقاليم (aqālīm)	何らかのまとまりを持った大きな「地方」を示す[19]

これらアラビア語単語[20]は *Masālik P* 中において、①そのままの形で用いられている、あるいは②省略されている、ないしは③他のアラビア語地域区分用語に置き換えられている（つまりアラビア語単語からアラビア語単語へ「訳」されている）。いずれにせよ、ペルシア語特有の単語への言い換えは行われていないのである[21]。いったいなぜこのような現象が生じているのだろうか。

第III章　地域区分用語についての考察（その１）

「アフロ・アジア（セム・ハム）語族」に属するアラビア語と「インド・ヨーロッパ語族」に属するペルシア語は文法体系の全く異なる２言語であるが、後者はアラブ・ムスリムによるイラン占領以降（７世紀後半以降）、前者の影響を非常に強く受けた。その結果、ペルシア語はアラビア文字で表記されることとなり、またアラビア語の語彙も多数取り込んだ。上に述べたような、ペルシア語訳書中に見られるアラビア語地域区分用語の使用は、ペルシア語自体にそれらのアラビア語単語が取り込まれてしまったこと、そしてそれらの単語が両言語の共通語となっていることを示している(22)。

もちろん、アラビア語の影響を受ける以前のペルシア語――ここでは主にサーサーン朝期に用いられた中世ペルシア語＝パフラヴィー語を指す――にも、「地域」を示す単語は存在した。キシュヴァル（kishvar）、クスト（kust）、オスターン（ostān）、シャフル（shahr）などがその例である(23)。しかしこれらの単語は、『諸道と諸国の書』訳本中において、アラビア語地域区分用語の対訳語としては使用されなかった(24)。『諸道と諸国の書』のペルシア語訳者は、これらの単語を知らなかったか、あるいは知っていたとしても、これらを用いて対訳する必要性を感じなかったのであろう。

問題は、なぜアラビア語の地域区分用語がペルシア語に取り込まれたのか、という点である。この点の検討は地理書のみで扱える範囲を越えており、詳しくは稿を改めて論じなければならないが、現時点では以下の２要因を推測できる。

１）行政上の地域区分の影響

アッバース朝初期までのアラブ・ムスリム政権は、中央アジアからアンダルスに至る領域を支配するにあたって、基本的には征服前の各地域の行政体系、特に徴税体系を踏襲した。例えばイランではサーサーン朝の、エジプトではビザンツ帝国のそれであり、行政上の言語もパフラヴィー語やギリシア語などが

用いられていた[25]。しかし支配者であるアラブにとっては、この広大な領域を統べるため、行政上アラビア語を用いることが必要不可欠であった。それゆえに地域区分用語もアラビア語での統一が図られ、その結果、地理書においても、アラビア語、ペルシア語に関わりなく、地域区分用語はアラビア語単語で表現されるようになったと推測される[26]。

このことは、アッバース朝の役人イブン・フルダーズビフが著したアラビア語行政地理書の記述からも垣間見える[27]。アラビア語地理書の草分け的存在であるこの行政地理書においては、アラビア語地域区分用語とペルシア語地域区分用語が併記されている箇所があり、まさに上記の点を傍証しているのである[28]。

ただし、イスタフリーの『諸道と諸国の書』に記された各地域が必ずしも行政地域とは限らないという点を考慮すれば、行政面の影響のみがペルシア語におけるアラビア語地域区分用語の使用を促したとは考え難い[29]。そこで考えられるのが、以下に記す第2の要因である。

2）地理学における共通認識

実は、ペルシア語地理書におけるアラビア語地域区分用語の使用は『諸道と諸国の書』訳本に限られたことではない。それは『諸道と諸国の書』ペルシア語訳より1世紀ほど前に著された最も古いペルシア語地理書『世界諸境域誌』においても見受けられるし、『諸道と諸国の書』よりやや後に著されたと目される『世界の書』、あるいはより後代のペルシア語地理書においても見受けられるペルシア語地理書共通の現象である[30]。つまり、ペルシア語地理書の著者たちの間には、地域区分用語にアラビア語単語を用いるという共通認識があったのだ。

この認識が生まれた背景には、アラビア語を共通学術語とした中世イスラーム世界の学問環境がある。そもそもこの時代にペルシア語地理書を執筆した者たちは、アラビア語を理解しクルアーンの知識を持ったムスリム知識人であった。『諸道と諸国の書』ペルシア語訳の存在自体が端的に示しているように、彼

らは7世紀以降イスラーム世界で発展したアラビア語地理学――アラビア語を表現手段とする地理学――から直接的／間接的に多くの地理情報を得た。と同時に、「地域区分用語にはアラビア語単語を用いる」といったアラビア語地理学の基礎的枠組みをも受け入れていったのであろう。この当時の学問のあり様こそ、ペルシア語におけるアラビア語地域区分用語の使用を揺るぎないものにしていった最大の要因であろうと考えられる。

結果としてこのことは、時代差やアラビア語／ペルシア語の差を越えて、中世イスラーム世界の地理学における地域区分用語の共通性を生み出している。そしてまさにこのことが、「「ムスリムの地理書」としてのアラビア語-ペルシア語地理書間の共通性」の一端を示しているのである(31)。

第IV章　地域区分用語についての考察（その2）

では、本来の（アラビア語中で用いられる）アラビア語地域区分用語とペルシア語に取り込まれたアラビア語地域区分用語との間に、意味や用法の違いは全くないのだろうか。ここで改めて、*Masālik P* 中におけるアラビア語地域区分用語の「訳」され方について考えてみよう。

すでに上述した通り、*Masālik P* におけるアラビア語地域区分用語の「訳」され方には以下の3パターンが確認される。

① もとのアラビア語単語がそのままの形で用いられる

【例】

(*Masālik A*, p.297.)

فاول كورة على جيحون مما وراء النهر الختل و الوخش

fa-awwal kūra ‘alā Jayḥūn min Mā warā’ al-nahr al-Khuttal wa al-Wakhsh

(ジャイフーン河岸にあって、マー・ワラー・アンナフル〔地方〕に含まれる一番最初の地域はアルフッタルとアルワフシュである。)

(*Masālik P*, p.233.　上記文章に対応する箇所)

نخستین کورهٔ کی بر جیحون است از ما وراء النهر ختلان است و وخش

nukhustīn kūra kī bar Jayḥūn ast az Mā varā' al-nahr Khuttalān ast va Vakhsh

(ジャイフーン河岸にあって、マー・ヴァラー・アンナフル〔地方〕に含まれる一番最初の地域はフッタラーンとヴァフシュである。)

② 地域区分用語自体が省略される

【例】

(*Masālik A*, p.57.)

و علی ناحیة جنوب بیت المقدس علی ستة امیال منه قریة تعرف ببیت لحم

wa 'alā nāḥiya janūb Bayt al-Muqaddas 'alā sitta amyāl min-hu qarya tu'raf bi-Bayt Laḥm

(エルサレムの南の地域の、エルサレムから6マイルのところに「バイト・ラフム（ベツレヘム)」として知られる村がある。)

(*Masālik P*, pp.60-61. 上記文章に対応する箇所)

و از بیت المقدس چون بر جانب جنوب روند بر شش میل قبه ای آید و آنجا دهی است که آنجارا بیت اللحم گویند

va az Bayt al-Muqaddas chūn bar jānib-i janūb ravand bar shish mīl qubba-ī āyad va ānjā dihī ast ki ānjā-rā Bayt al-Laḥm gūyand

(エルサレムから南へ向かったとき6マイルほど（行ったところ）でドームにたどり着く。そこには村があって「バイト・アッラフム（ベツレヘム)」と言われている。)

③ 他のアラビア語地域区分用語に置き換えられる

【例】

(*Masālik A*, p.37.)

فاما برقة فانها مدینة وسطة لیست بکبیرة و حوالیها کورة عامرة کبیرة

fa-ammā Barqa fa-inna-hā madīna wasaṭa laysat bi-kabīra wa ḥawālī-hā kūra 'āmira kabīra

(バルカについて。それは中程度の大きさの都市である。大きくはない。そ

の周辺は人の多い大きな地域である。

(*Masālik P*, p.40.　上記文章に対応する箇所)

اما برقه شهرکی میانه است نه خرد و نه بزرگ و ناحیتی آبادان دارد

ammā Barqa shahrakī miyāna ast na khurd va na buzurg va nāḥiyatī ābādān dārad

(さて、バルカはそこそこの大きさの小都市である。小さくもなければ大きくもない。〔その周囲に〕人の多い地域を抱えている。)

このうち③は、アラビア語における場合とペルシア語における場合で用語の用法に差がある可能性を示している。この点についてさらに詳細に検討すべく、以下では「訳」され方の具体例を見てみたい。

ここでは、地域区分用語の中でも比較的使用頻度が高く、「地域」の意味で一般的によく用いられる iqlīm、kūra、nāḥiya の 3 単語について見てみることにした。下に掲載した表 1 ～ 6 をご参照いただきたい。表 1、2、3 は *Masālik A* 中に出現する 3 単語が *Masālik P* 中でどのような対訳語をあてられているかを示し、表 4、5、6 は逆に *Masālik P* 中に出現する 3 単語が *Masālik A* 中のどのアラビア語表現の対訳語となっているかを示している。

表 1 ：訳本中におけるiqlīmの対訳語

*Masālik A*中での出現回数	62回	(うち単数形iqlīmで42回、複数形aqālīmで20回)
*Masālik P*中での対訳語	aqālīm	1 回
	iqlīm	16回
	iqlīm-hā	7 回
	nāḥiyat	2 回
	vilāyat	2 回

表２：訳本中におけるkūraの対訳語

*Masālik A*中での出現回数	108回	（うち単数形kūraで81回、複数形kuwarで27回）
*Masālik P*中での対訳語	ḥudūd	1回
	iqlīm	1回
	jāygāh（「場所」）	1回
	kūra	31回
	kūra-hā	3回
	kūra-hā va navāḥī	1回
	kuvar	1回
	mavāẓi‘（pl.「場所」）	1回
	nāḥiyat	12回
	navāḥī	7回
	shahr-hā（「諸都市」）	1回
	vilāyat	3回
	zamīn（「土地」）	1回

表３：訳本中におけるnāḥiyaの対訳語

*Masālik A*中での出現回数	187回	（うち単数形nāḥiyaで101回、複数形nawāḥī（nawā-ḥin）で86回）
*Masālik P*中での対訳語	diyār	1回
	ḥudūd	4回
	nāḥiyat	60回
	navāḥī	37回
	shahr（「都市」）	1回
	shahr-hā（「諸都市」）	1回
	vilāyat	3回

表4：訳本中のiqlīm

*Masālik P*中での出現回数	63回	(うち単数形iqlīmで42回、アラビア語複数形aqālīmで3回、ペルシア語複数形iqlīm-hāで18回)
*Masālik A*中の元のアラビア語表現	‘amal	2回
	aqālīm	5回
	buldān (al-Islām)	1回
	kuwar	1回
	iqlīm	19回
	mudun	1回
	(sā’ir) al-umam	1回

表5：訳本中のkūra

*Masālik P*中での出現回数	39回	(うち単数形kūraで34回、アラビア語複数形kuvarで1回、ペルシア語複数形kūra-hāで4回)
*Masālik A*中の元のアラビア語表現	kūra	28回
	kuwar	8回

表6：訳本中のnāḥiyat

*Masālik P*中での出現回数	285回	(うちペルシア語単数形nāḥiyatで171回、アラビア語単数形nāḥiyaで8回、アラビア語複数形navāḥīで101回、ペルシア語複数形nāḥiyat-hāで5回)
*Masālik A*中の元のアラビア語表現	a‘māl	2回
	ajnād	1回
	arḍ	1回
	bādiya (「沙漠」)	1回
	balad	1回
	bilād	1回
	buldān	1回

*Masālik A*中の元のアラビア語表現	ḍiyā‘ (pl.「私領地」)	1回
	ḥadd	1回
	ḥadd sawād	1回
	ḥawma	1回
	hiya wa mā ḥawālī-hā min al-qurā	1回
	ḥudūd	2回
	ḥudūd ‘amal	1回
	iqlīm	2回
	jund	2回
	kūra	14回
	kuwar	6回
	makhālīf	1回
	manābir (pl.「ミンバル<都市」)	1回
	mawāḍi‘ (pl.「場所」)	2回
	mudun (「諸都市」)	7回
	al-mudun wa al-qurā	2回
	nāḥiya	61回
	nawāḥī (nawāḥin)	36回
	qurā (quran) (「村々」)	6回
	qurā balad	1回
	quran mujtama‘a	1回
	quran muttaṣila wa ‘imāra	1回
	quran wa mazāri‘	1回
	quran wa rasātīq	1回
	rasātīq	7回
	rustāq	12回
	sawād	2回

これら6つの表からは、以下のような特徴を見出すことができる。

iqlīm の場合

【表1より】

○ *Masālik A* では全部で62回出現。*Masālik P* ではこのうち34回で省略されている。

○ *Masālik P* でもそのまま iqlīm と記されることが比較的多い (24回)。

○ 別な単語に「訳」される場合もあるが、そのような例は少ない (4回)。

○ vilāyat という単語に「訳」される場合がある (2回)。

【表4より】

○　*Masālik P* では全部で63回出現しており、*Masālik A* にこの単語が出現しない箇所でも訳本で補われている場合があることがわかる。

kūra の場合

【表2より】

○　*Masālik A* では全部で108回出現。*Masālik P* ではこのうち44回で省略されている。

○　*Masālik P* 中でもそのまま kūra と記されることが比較的多い（36回）。

○　別な単語（特に nāḥiya）に「訳」される場合も多い（28回）。

○　vilāyat という単語に「訳」される場合がある（3回）。

【表5より】

○　*Masālik P* では全部で39回出現。39回のうち3回は、*Masālik A* に元の表現がなく、訳される際に新たに付け加えられている。

○　39回中36回においては、*Masālik A* 中の元のアラビア語表現も kūra である。このことから、アラビア語においてもペルシア語においてもこの単語の意味は同じである、ということがわかる。

nāḥiya の場合

【表3より】

○　*Masālik A* では全部で187回出現。*Masālik P* ではこのうち80回で省略されている。

○　*Masālik P* 中でもそのまま nāḥiya と表現されることが比較的多い（97回）。

○　別な単語に「訳」される場合もあるが、そのような例は少ない（9回）。

○　vilāyat という単語に置き換えられている場合がある（3回）。

【表6より】

○　*Masālik P* では全部で285回出現し、*Masālik A* 中より *Masālik P* 中のほうで使用回数が非常に多い。*Masālik A* 中の元の表現も様々であることから、この単語が *Masālik P* 中において「地域」の意味で汎用的に

用いられていることがわかる。

これらの特徴を包括すると「*Masālik P* 中の iqlīm、kūra、nāḥiya の 3 単語が、基本的にはアラビア語本来の意味・用法を踏襲しつつ、場合によっては *Masālik A* に見られない訳本独特の用法で用いられている」ということを指摘できよう。特に nāḥiya の場合、*Masālik P* で *Masālik A* 以上に多用されていることから、その傾向の強いことがわかるのである(32)。

また、表 1 ～ 3 において特に興味深いのが、iqlīm、kūra、nāḥiya のいずれの場合も *Masālik P* 中で vilāyat という対訳語のあてられる場合があるという点である。この単語は、ペルシア語でこそ vilāyat とアルファベット転写されるが元々は wilāya というアラビア語単語であり、アラビア語語根 w-l-y の派生形である(33)。その語根には「監督する」「統治する」という意味があり、派生形 wālī は「地方総督、太守」の意味で時代／地域を問わず幅広く用いられた。ゆえに wilāya (vilāyat) は、基本的には総督たるワーリーの地方管轄権、およびその管轄地域を指し示す。

Masālik A 中において、この wilāya という単語はたった 2 回しか出現しない。以下の引用がその 2 例である。

① *Masālik A*, p.45.

彼ら（ウマイヤ家の者）のうち、最初に〔アンダルスへ〕渡った者は ʻAbd al-Raḥmān b. Muʻāwiya b. Hishām b. ʻAbd al-Malik b. Marwān であり、それはアッバース家の統治の初めのこと (fī awwal wilāya banī al-ʻAbbās) であった(34)。

② *Masālik A*, p.323.

彼ら (Sibāʻīya として知られるアラブの一族) には、サマルカンド〔の街〕において wilāyāt があった(35)。

これらを見ればわかる通り、*Masālik A* においてこの単語は「地域」の意味では用いられていない。ところが *Masālik P* 中においてこの単語はなんと110回も登場し、それが「ワーリーの管轄地域」を意味するかどうかはともかく、「地域」を意味する語として用いられているのである（下記表 7 を参照）。この点が、

表７：訳本中のvilāyat

*Masālik P*中での出現回数	110回	（うち単数形vilāyatで107回、複数形vilāyat-hāで３回）
*Masālik A*中の元のアラビア語表現	‘amal	１回
	aqālīm	１回
	arāḍī	１回
	arḍ	４回
	aṭrāf（「諸方」）	１回
	baḥr（「海」）	１回
	balad	９回
	bayt（「家」）	１回
	bilād	23回
	buldān	７回
	dār (al-Islām)（「イスラーム世界」）	４回
	ḍiyā‘	１回
	diyār	５回
	iqlīm	１回
	jamī‘	１回
	kūra	３回
	mamlaka	２回
	nāḥiya	１回
	nawāḥī	１回
	wilāya	１回
	wilāyāt	１回

アラビア語地域区分用語に関する、*Masālik A*-*Masālik P* 間の最も顕著な、かつ最も重要な違いである。

上に見たような *Masālik A*-*Masālik P* 間の違いが、果たしてアラビア語とペルシア語という言語の差に起因するものなのか、あるいは原本と訳本の執筆年の時間差に起因するものなのかは、現時点では不明である。また、なぜ wilāya (vilāyat) がペルシア語訳本で多用されているのか、またアラビア語の wilāya とペルシア語の vilāyat に意味の違いはあるのか、などの点も今のところわか

らない。これらの点については、『諸道と諸国の書』以外のアラビア語／ペルシア語地理書も精査した上で、稿を改めて論じることにしたい。

おわりに

本稿では、第一に「アラビア語-ペルシア語地理書間の共通性」、第二に「ペルシア語地理書の持つ独自性」という2つの観点に沿って、イスタフリー著『諸道と諸国の書』のアラビア語原本とペルシア語訳本を単語レヴェルで比較検討した。その結果、「地域」を意味するアラビア語単語が訳本でもそのまま用いられていることを指摘し、ペルシア語におけるこれらアラビア語地域区分用語の使用が「アラビア語-ペルシア語地理書間の共通性」の一端を示していることを明らかにした。また、その一方で、ペルシア語訳本中のこれらの用語がアラビア語原本中に見られない用法で用いられている点も指摘し、この点がペルシア語地理書としての独自性を示す可能性があることを明らかにした。

特に wilāya (vilāyat) というアラビア語地域区分用語については、ペルシア語訳本中において明らかに原本中と異なる用法で多用されており大変興味深い。この単語の原義が持つ重要性を考慮すれば、他の地理書も用いた詳細な調査分析が必要不可欠である。この点は今後の課題としたい。

冒頭述べたとおり、本研究の最終的な目標は①「「ムスリムの地理書」としてのアラビア語-ペルシア語地理書間の共通性」と②「ペルシア語地理書のペルシア語地理書であるがゆえの独自性」の解明であり、本稿はその序論として位置づけられる。今後は『諸道と諸国の書』以外の地理書群の調査も進めることにより、問題の解明を目指したい。

注

(1) これら地理書は大まかに「数理や天文の観点から世界地理の分析を試みたもの」と「地誌的傾向の強いもの」の2派に分けられるが、本稿で「地理書」と言う場合は後者を念頭に置く。この時代この地域の地理書／地理学の潮流については、竹田新「西暦9・10世紀のアラビア語地理文献について―人文地理を中心に―(1) (2) (2-2)」(『大阪外国語大学論

集』24（2000年）、pp.191-212／28（2003年）、pp.173-192／30（2004年）、pp.149-168）を参照のこと。

（2） 3点とも校訂本が出版されている（anon., *Ḥudūd al-'Ālam*, ed. Manūchehr Sotūde, Tehrān, 1362.；Muḥammad b. Najīb Bakrān, *Jahān-nāma*, ed. Muḥammad Amīn Riyāḥī, Tehrān, 1342.；『諸道と諸国の書』校訂本の書誌情報については本稿第Ⅰ章を参照のこと。）。ペルシア語地理書群の概略および写本残存状況に関しては、Storey, C.A., *Persian Literature : A Bio-bibliographical Survey*, vol.2 part 1, London, 1972, pp. 117-192.とAḥmad Monzavī, *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭī-ye Fārsī*, vol.6, Tehrān, 1353, pp.3929-3989.を参照のこと。なお地理書に類するジャンルとして旅行記と奇譚集があり、前者では11世紀に著されたナースィル・フスラウの『旅行記』が著名（Nāṣir Khusrau, *Safar-nāma*, ed. Muḥammad Dabīr-Siyāqī, Tehrān, 1381（7th ed.）.）、後者では13世紀初頭頃のものと思われる『被造物の諸奇事と存在物の諸珍事』がある（Muḥammad b. Maḥmūd b. Aḥmad Ṭūsī, *'Ajāyib al-Makhlūqāt wa Gharāyib al-Mawjūdāt*, (ed.) Manūchehr Sotūde, Tehrān, 1345（2nd ed.: 1382））。

（3） イスラーム世界でムスリムによって探求された地理学は、研究者の間で基本的に①「イスラーム地理学（Islamic Geography）」、②「ムスリムの地理学（Geography of Muslims）」、③「アラブ地理学（Arab Geography）」の3通りの呼ばれ方をしている。このうち①と②の違いは、「ヨーロッパ諸語では、理念としての「イスラーム世界」と現実にそこにある「ムスリム世界」を区別することが可能なのである」という羽田正の指摘（羽田正『イスラーム世界の創造』東京大学出版会、2005年、p.17.）から理解できる。③は多くの地理書がアラビア語で著されたことによるのであろう。実際にどの言葉を選ぶかは研究者の研究姿勢によるが、①は地理学上のイスラームの役割を重視しすぎている観があり、③は地理学上の非アラブ要素を無視している観があるので、本稿では②を用いることにする。

（4） Maqbul Ahmad, S., "DJUGHRĀFIYĀ", in *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 11vols., Leiden, 1979-2002（以下 *EI*²と略記）.；Крачковский, И.Ю., *Арабская Географическая Литература*, Москва, 1957（ただし筆者は下記ペルシア語訳を参照した：tr. by Abū al-Qāsem Pāyande, *Ta'rīkh-e Neveshte-hā-ye Joghrāfiyāyī dar Jahān-e Eslāmī*, Tehrān, 1379. このペルシア語訳では書名が『イスラーム世界における地理学文献史』となっており、現代イラン人の地理学史観を示していて興味深い。）；Miquel, A., *La geographie humaine du monde musulman jusqu' au milieu du* 11*e siecle*, 4vols., Paris & La Haye, 1967-1988.

（5） 本稿における「イラン」という言葉は「歴史的イラン世界」という意味で用いられる。その範囲は現在のイラン・イスラーム共和国の領域より広いが、境界は明確ではない。詳しくは清水宏祐「イラン世界の変容」『世界各国史9　西アジア史II　イラン・トルコ』

(山川出版社、2002年) pp.60-61. を参照。

(6) 清水宏祐「ペルシア語地理書 *Ḥudūd al-'Ālam* における ḥudūd の概念」『史淵』140(2003年)、p.1. を参照。なお清水はこの論文において、地理書全般でよく用いられる ḥudūd というアラビア語単語がペルシア語地理書 *Ḥudūd al-'Ālam* においては特異な用法で用いられているという点を指摘した。

(7) 『諸道と諸国の書』アラビア語原本冒頭の、以下の下りをご参照いただきたい。

> さて、私(イスタフリー)はこの本の中で、諸国にわかれた世界諸地域のことを述べた。(特に)その中でもイスラーム世界のことについて述べようと意図した。
>
> اما بعد فانی ذکرت فی کتابی هذا اقالیم الارض علی الممالک و قصدت منها بلاد الاسلام
>
> (al-Iṣṭakhrī, *al-Masālik al-Mamālik*, Leiden, 1927, p.2.)

この記述に対応するペルシア語訳本中の記述は以下の通りである。

> さて、著者(イスタフリー)は以下のように述べる。この本を著するにあたっての私の意図は、世界の諸地域、その中でも特にイスラームの円に囲まれた地域について述べることである。
>
> اما بعد چنین گوید خداوند سخن که مراد ما از تصنیف این کتاب آنست که اقلیمهای روی زمین یاد کنیم آنچه دایره اسلام بدان محیط است
>
> (Iṣṭakhrī, *Masālik va Mamālik*, Tehrān, 1340, p.3.)

この両者を見比べれば、訳者が原文にできるだけ忠実に翻訳しようとしている意図が見て取れるだろう。この箇所のみならず、訳本には原本をできるだけ逐語訳しようとする意図が全体的に見て取れる。従って両者を比較検討する場合、本文内容の比較はそれほど重要ではなく、単語レヴェルでの比較のほうが有益である。

(8) さしあたって "AL-IṢṬAKHRĪ" in *EI*²; 竹田前掲論文 (2003年、pp.182-183) を参照。

(9) 先行研究は、この地理書の叙述様式が先学バルヒー (Abū Zayd Aḥmad b. Sahl al-Balkhī 322/934年没)の地理書の様式を受け継いでいると推定し、イスタフリーをいわゆる「バルヒー学派」に属する1人とみなす。竹田前掲論文 (2003年、p.181) を参照。

(10) 写本情報は (ed.) J.B. Harley & David Woodward, *Cartography in the Traditional Islamic and South Asian Societies*, *The History of Cartography* vol.2 book 1, Chicago & London, 1992, pp.130-133. の情報に基づく。なお、(ed.) J.H. Moeller, *Liber Climatum Auctore Scheicho Abu-Ishako el-Faresi vulgo el-Istachri*, Gotha, 1839. はイスタフリー地理書 (『諸道と諸国の書』の簡略版) 写本のファクシミリ版である。

(11) カイロ版 (②) は、*Masālik A* (①) が用いていない写本を校訂に利用しており極めて有益であるが、惜しむらくは入手困難である。また①が②出版後も依然として研究に利用され続けていることなども考慮して、本稿ではあえて①を利用することにした。なお、ペルシア語訳本の「マー・ワラー・アンナフル章」の記述は、①中の文章よりも、②が脚注で校訂引用している alif 写本 (エジプト国立図書館蔵 Jughrāfiyā 199) の文章に大変類似している。この写本とペルシア語訳本との比較検討を、いずれ別稿にて論じたい。

(12) 写本情報の典拠は上記注10のものと同。加えて校訂本③の校訂者序文も参照のこと。なお、ジャイハーニー（al-Jayhānī 没年未詳（10世紀前半））執筆の地理書のペルシア語訳としてマシュハドから出版された校訂本（Abū al-Qāsim b. Aḥmad Jayhānī, *Sarzamīn-hā-yi Islāmī*, (ed.) Fīrūz Manṣūrī, Mashhad, 1368.）については、イスタフリーの地理書であるとの意見もあり、今後詳細な検討を要する。

(13) ここでは挙げなかったが、お金の単位である「ディーナール」や「ディルハム」も *Masālik A* と *Masālik P* に共通して使われる単語（ギリシア語起源）である。なお「東西南北」を示す単語に関しては、前イスラーム期のペルシア語にはペルシア語特有の単語が存在したが、近世ペルシア語ではアラビア語単語に置き換わった。この点に関しては Ḥusayn Shahīdī, *Chahār-Sū va Negareshī Kūtāh bar Ta'rīkh va Joghrāfiyā-ye Ta'rīkhī*, Tehrān, 1365. に詳しい。

(14) これら地域区分用語の基本的な用法に関しては Miquel, A., "L'organisation de l'empire", *La Geographie Humaine du Monde Musulman jusqu'au Milieu du 11e Siecle : Les Travaux et les Jours*, Paris, 1988, pp.125-140（特に pp.131-134）. を参照。ただしミケルも述べている通り、これらの用語の用法は比較的フレキシブルである。

(15) このうち kūra、rustāq、ṭassūj に関しては、Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, 7vols., Bayrūt, n.d., vol.1, pp.54-55.（(tr.) Wadie Jwaideh, *The Introductory Chapters of Yāqūt's Mu'jam al-Buldān*, Leiden, 1959, pp.56-58.）も参照のこと。

(16) balad は、単数形では「まち」を意味するが、複数形では（「諸都市」というよりも）「地域」的広がりを意味する。dār も、単数形では「家」を意味するが、複数形では（「家々」というよりも）「地域」的広がりを意味する。どちらの単語も「イスラム世界」（Bilād al-Islām/Dār al-Islām）を指す表現の中に使われる単語である。

(17) ḥadd については清水前掲論文を参照。

(18) mamlaka については"MAMLAKA" in *EI*²を参照。

(19) iqlīm に関しては、竹田新「Iqlīm 考—Yāqūt を基に—」『オリエント』26-2 (1983年)、pp.75-94. を参照のこと。

なお、ここで列記した単語以外に、جند (jund, pl.اجناد (ajnād)) やرم (ramm, pl.رموم (rumūm)) やمخلاف (mikhlāf, pl.مخاليف (makhālīf)) という地域区分用語も原本で使われている。jund の原義は「軍隊」であり、特にシリアの「軍管区」を指す用語として用いられた（cf. "DJUND" in *EI*²）。しかし訳本においては、この単語は完全に省略された。*Masālik A*, pp.55-56と *Masālik P*, p.59の記述を比較すると、おそらく訳者がこの単語の意味を理解できなかったと推測できる。ramm（<zamm）はファールス地方のクルド系部族の居住地域に使われる用語であり、その特殊性ゆえここでは挙げなかったが、*Masālik P* 中でも同じ ramm という単語が用いられている。この単語については G. Le Strange, *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge, 1930, p.266. を参照のこと。

mikhlāf もイエメン地方内の地域に限って用いられる特殊な用語である（cf. "MIKHLĀF" in *EI*²）。原本では p.14で使用例が確認されるが、訳本の該当個所（p.16）では navāḥī に置き換えられている。

(20) rustāq のみは明らかにペルシア語起源の単語であるが、*Masālik A* ばかりでなくアラビア語資料全般に見られることからも、アラビア語化（ムアッラブ）された単語とみなしうる。iqlīm（ギリシア語起源）や kūra（ギリシア語起源説とペルシア語起源説の 2 説あり（cf. "KŪRA" in *EI*²））についても同様である。

(21) ただし意訳される場合などは除く。

(22) 地域区分用語 rustāq のみは逆にペルシア語からアラビア語へ取り込まれているわけだが、この単語がいつごろアラビア語に取り込まれたのかは明らかではない。なおアラビア語地理書中に見られるペルシア語の要素に関しては、クラーマース（Kramers, J.H.）が若干の考察を加えている（Kramers, J.H., "L'influence de la Tradition Iranienne dans la Geographie Arabe", *Analecta Orientalia I*, Leiden, 1954, pp.148-149.）。

(23) 中世ペルシア語の地域区分用語について、あるいはサーサーン朝後期の行政地域のあり様については、下記の研究を参照のこと。Christopher Brunner, "Geographical and Administrative Divisions: Settlements and Economy", *The Cambridge History of Iran*, vol. 3(2), ed. by E. Yarshater, Cambridge Univ. Press, 1983, pp.747-777. ; V.G. Lukonin, "Political, Social, and Administrative Institutions, Taxes and Trade", *The Cambridge History of Iran*, vol. 3(2), Cambridge, 1983, pp.681-746（特に pp.729-734）. ; 春田晴郎「イラン系王朝の時代」『岩波講座世界歴史 2　オリエント世界』（岩波書店、1998年）pp.61-93（特に pp.84-87）. ; anon., *Šahrestānīhā ī Ērānšahr*, (tr.) Touraj Daryaee, Costa Mesa, 2002, pp.1-11(translator's introduction).

(24) shahr のみは *Masālik P* でも使われているが、中世ペルシア語における意味――ある都市を中心として広がる「地方」――でではなく、アラビア語の madīna の対訳語として「都市」の意味で用いられている。本来、中世ペルシア語において「都市」の意味で用いられる単語は shahrestān であったが、*Masālik P* においてこの単語は shāristān という表記で都市内の「市街地」を指す言葉として用いられている。

なお中世ペルシア語の地域概念 kishvar がアラビア語地理書中の世界 7 iqlīm 説――世界が 7 つの iqlīm から構成されているとする説――に影響を与えていることは先行研究で指摘されているが、ではなぜ kishvar という語自体はアラビア語地理書に導入されなかったのか、またなぜ『世界諸境域誌』や『諸道と諸国の書』などの初期ペルシア語地理書においてこの語が使われていないのかという点は今後検討されるべきであると思う。世界7 iqlīm 説と kishvar の関係についてはクラーマース前掲論文 p.148. および *Šahrestānīhā ī Ērānšahr* p.5. を参照。

(25) 嶋田襄平「イスラム国家の成立」『岩波講座世界歴史 8　中世 2 西アジア世界』（岩波書

店、1969年）pp.68-69．エジプトの状況については森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』（岩波書店、1975年）pp.238-242．に詳しい。

(26) ウマイヤ朝期に行われた行政用語のアラビア語化政策に関しては、嶋田襄平「イスラーム初期のディーワーン制度」『初期イスラーム国家の研究』（中央大学出版部、1996年（初出『中央大学文学部紀要』史学科9、1963年））p.253．；佐藤次高『イスラームの国家と王権』（岩波書店、2004年）p.82．を参照。

(27) 実はこのイブン・フルダーズビフ地理書の書名もイスタフリー地理書と同じく『諸道と諸国の書』（*al-Masālik wa al-Mamālik*）であるが、紛らわしいので本文中には記さなかった。

(28) Ibn Khurdādhbih, *al-Masālik wa al-Mamālik*, Leiden, 1889, pp.5-6．この箇所ではkūra と astān（＜ostān）の併記が見られ、著者イブン・フルダーズビフのペルシア語地理区分用語への配慮が見受けられる。この著作以降、地理書におけるペルシア語地域区分用語への言及は、ヤークート（626/1229年没）の『地誌集成 *Mu'jam al-Buldān*』を除いて殆ど見られない。

(29) アラビア語地域区分用語は種類が多く、地域区分の方法も単語によって異なっている。例えばkūra やnāḥiya、'amal といった行政地域を示す可能性のある単語の場合は、上述の理由からペルシア語中でも翻訳されず同じアラビア語単語が用いられても不思議はないが、行政地域を示すとは考え難いiqlīm、bilād 等の単語の場合、ペルシア語中で用いられる理由として「行政上の地域区分の影響」を挙げることは困難であろう。

(30) 例えば『世界諸境域誌』においては、地域区分用語としてnāḥiyat やḥudūd が多用される。

(31) 地理書において、ある土地の広がりを1つの地域とみなすにあたっては、もちろん地勢面での特徴や政治・経済面での統一性、あるいは地理学上の伝統などが根拠とされたが、結局のところそれらの根拠を取捨選択して利用する著者の意図に拠るところが大きかった。それゆえに地域区分の結果には地理書間で差異が生じた。例えばイスタフリーはイスラーム世界を20のiqlīm に地域区分したが、ムカッダスィーはイスラーム世界を14のiqlīm に区分した。また『世界諸境域誌』の著者は「世界」を51のnāḥiyat に区分した。つまり地理書の著者たちは、当時の行政事情や地理学の伝統を考慮しつつも、（現代風に言えば）学者の観点からある程度独自に「地域を設定」していたのである。従って彼らの共通性は、各々の地域区分作業の結果にではなく、彼ら全員が地域区分の枠組みとしてアラビア語地域区分用語を採用したことに求められねばならない。

(32) 実は『世界諸境域誌』においてもnāḥiya は多用されている。筆者の調査によると『世界諸境域誌』における同単語の使用回数は612回で、他の地理書と比べても断然に多い。このことからペルシア語におけるnāḥiyat の用法がアラビア語のnāḥiya と異なっていることを推測できる。

(33)　wilāya の研究としては松本耿郎『イスラーム政治神学　ワラーヤとウィラーヤ』(未来社、1993年)がある。この研究において松本は、主に法学や神学の観点からこの単語の意味や歴史的変遷を追ったが、地理書に見られる wilāya については言及していない。

(34)　ちなみに *Masālik P* でも vilāyat とそのまま記されている（*Masālik P*, p.48)。

(35)　この記述における wilāya の意味は不明瞭である。ちなみに *Masālik P* でも vilāyat-hā（vilāyat のペルシア語複数形）と記されている（*Masālik P*, p.253)。